

報告番号	※甲	第	号
------	----	---	---

主 論 文 の 要 約

論文題目

目標志向性と学習観の関係の検討と学習目標志向性を高めるための教育的介入に関する研究

氏 名

名

横山 真衣

論 文 内 容 の 要 約

学習に積極的に取り組む、もしくは、効果的な学習方略を取るといった、学習者の適応的な学習行動を促進させるためには、学習行動を規定する要因や要因間の関係を把握することが重要である。本論文は、要因として個人の目標志向性と学習観を取り上げた。目標志向性とは、学習者個人の達成目標に関する特性であり、以下の3つがある。(1) 学習目標志向性：挑戦を通して新たな知識や技能を習得することを目標とする、(2) 遂行接近目標志向性：肯定的な評価を受けることを目標とする、(3) 遂行回避目標志向性：否定的な評価を避けることを目標とする。学習観とは、「学習とはどのようなものか」に関する学習者個人の信念である。目標志向性と学習観はどちらも適応的な学習行動に影響を与える重要な要因であることが明らかにされているが、両者の関係を検討した研究は見受けられない。そこで、本論文の1つ目の研究では目標志向性と学習観の関係を検討した。

多重目標視点の研究によると、学習者個人は単独の達成目標を志向しているのではなく、いくつもの達成目標を並列的に志向している。学習者個人の目標志向性を把握するためには、多重目標視点の観点から目標志向性を検討する必要がある。複数の研究において共通して見られる一般的な目標志向性タイプは6つある。すなわち、(1) 学習目標志向性が高い<学習目標高タイプ>、(2) 遂行接近目標志向性が高い<遂行接近目標高タイプ>、(3) 学習目標志向性と遂行接近目標志向性が高い<高目標タイプ>、(4) 全ての目標志向性が中程度の<中目標タイプ>、(5) 学習目標志向性と遂行接近目標志向性が低い<低目標タイプ>、(6) 回避的な目標志向性が高く他の目標志向性が低い<努力回避 (work-avoidance) タイプ>である。このうち、<学習目標高タイプ>と<高目標タイプ>は、モチベーションが高く、学校や授業に対して肯定的な認識や感情を抱き、効果的な学習方略を取ることが示されており、適応的な学習者として捉えられている。反対に、<低目標タイプ>と<努力回避タイプ>は、モチベーションが低く、学校や授業に対して否定的な認識や感情を抱き、効果的な学習方略を取らないことが示されており、不適応な学習者として捉えられている。目標志向性タイプは適応的なタイプか不適応なタ

イブかの二元論的な学習者像の把握に留まっている。そこで、本論文の2つ目の研究では、これまで断片的に捉えられてきた目標志向性タイプの学習者像を学習観という統合的な観点から捉え直した。

学習目標志向性の高さは内発的動機付けの高さと正の関連があることや、学習目標志向性が高いと効果的な学習方略を取ることが明らかにされている。繰り返しその優越性が示されている学習目標志向性を教育的介入によって高めることが期待されているが、未だ実証的な研究が行われていない。そこで、本論文の3つ目の研究では、学習目標志向性を高めるための教育的介入方法を検討した。

本論文は全5章で構成されている。以下に各章の概要を示す。

第1章「序論」では、本論文の鍵概念となる目標志向性と学習観について説明を行い、これらが学習行動に影響を与える重要な要因であることを示した。

第2章「研究1：目標志向性と学習観の関係の検討」では、学習行動に対する目標志向性と学習観の因果関係を検討した。具体的には、モデルを3つ作成し共分散構造分析を用いて比較を行った。モデル1は、目標志向性が、直接、もしくは学習観を媒介して、学習行動を規定するというモデルである。モデル2は、学習観が、直接、もしくは目標志向性を媒介して、学習行動を規定するというモデルである。モデル3は、目標志向性と学習観がそれぞれ学習行動を規定するというモデルである。その結果、モデル1の適合度が最も良好であったため、目標志向性の高低が学習観の規定要因になる可能性が示唆された。また、目標志向性、学習観、学習行動の下位構造に着目し、因果関係を検討した。その結果、以下の3つの可能性が示唆された。(1) 学習目標志向性が高いと適応的な学習行動を促進する学習観を持つ。(2) 遂行接近目標志向性が高いと適応的な学習行動を抑制する学習観を持つ。(3) 遂行回避目標志向性が高いと適応的な学習行動を促進する学習観と抑制する学習観の両方を持つ。

第2章(研究1)の結果から、目標志向性の高低が学習観の規定要因になることが示された。このことを前提とし、第3章「研究2：多重目標視点からの学習観と学習行動の検討」では、目標志向性のタイプ別に学習観を検討し、各タイプの特徴を明らかにすることを試みた。具体的には、<低目標タイプ><高目標タイプ><遂行回避目標高タイプ><学習目標高タイプ>の4つのタイプの学習観を比較検討した。その結果、タイプによって保持する学習観が異なることが示唆された。<高目標タイプ>は複数の種類の学習観を並列的に持ちあわせ、<学習目標高タイプ>は自律的学習観を持ち、<低目標タイプ>と<遂行回避目標高タイプ>は強制・記憶という学習観を持つ、という傾向が見られた。旧来は、<高目標タイプ>と<学習目標高タイプ>は、適応的な学習者として同じように捉えられてきた。本研究では、<高目標タイプ>と<学習目標高タイプ>が保持する学習観が異なることを示し、学習観から見受けられるそれぞれの学習者像を明らかにした。具体的には、<高目標タイプ>は、全ての学習観の得点が高かったことから、学習を複数の観点から多面的に捉えているタイプ、<学習目標高タイプ>は、「自律的学習観」の得点のみが高かったことから、学習は他者に強制されるものではなく、自律的に取り組むものだと捉えているタイプであることが示された。

第2章(研究1)と第3章(研究2)の結果から、高い学習目標志向性は、適応的な学習観や学習行動を促進させる重要な要因であることが示された。この結果を踏まえ、第4章「研究3：学習目標志向性を高めるための教育的介入」では、学習

目標志向性を高めるための教育的介入方法の検討を行った。ここでは、介入方法として、学習者が自分自身のパフォーマンスに対して評価を行う自己評価と、学習者同士が互いのパフォーマンスに対して評価し合う相互評価を取り上げた。自己評価と相互評価が学習目標志向性の変化に与える効果を、介入前の遂行接近目標志向性・遂行回避目標志向性の調整効果に着目して検討した。具体的には、大学で開講された授業の参加者を統制群、自己評価群、相互評価群に分け、自己評価群には自己評価を、相互評価群には相互評価を行わせた。結果として、以下3点が示唆された。

(1) 相互評価の学習目標志向性の変化への効果は介入前の遂行接近目標志向性と遂行回避目標志向性によって異なる。(2) 介入前の遂行接近目標志向性が高い、もしくは、介入前の遂行回避目標志向性が低い学習者に対しては、相互評価は学習目標志向性を高めるために効果的である。(3) 介入前の遂行接近目標志向性が低い、もしくは、介入前の遂行回避目標志向性が高い学習者に対しては、相互評価は学習目標志向性を高めるためには逆効果である。

第5章「総括」では、3つの研究の結果をまとめた上で、各研究の意義について示した。また、教育的示唆、および、目標志向性の研究に対する示唆について述べた。そして最後に、研究の限界と今後の展望について言及した。